

1. 略歴

- 1997年4月 上智大学文学部英文学科 入学
2001年3月 同 卒業
2001年4月 上智大学文学部哲学科 入学 (3年次学士入学)
2003年3月 同 卒業
2003年4月 東京大学大学院人文社会系研究科基礎文化研究専攻哲学専門分野修士課程 入学
2005年3月 同 修了 (修士 (文学) 取得)
2005年4月 東京大学大学院人文社会系研究科基礎文化研究専攻哲学専門分野博士課程 進学
2006年6月 東京大学大学院人文社会系研究科 21世紀COE「死生学の構築」リサーチアシスタント
(~2007年3月)
2007年10月 東京大学大学院人文社会系研究科グローバルCOE「死生学の展開と組織化」リサーチ
アシスタント (~2008年3月)
2010年3月 東京大学大学院人文社会系研究科基礎文化研究専攻哲学専門分野博士課程 単位取得退学
2010年4月 上智大学大学院哲学研究科 特別研究員 (~2013年3月)
2013年5月 東京大学大学院人文社会系研究科死生学・応用倫理センター (上廣死生学・応用倫理講座)
特任研究員
2013年9月 博士 (文学) 取得 (東京大学大学院人文社会系研究科)
2014年4月 三重県立看護大学看護学部看護学科 准教授
2017年4月 東京大学大学院人文社会系研究科 特任准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

行為論、ケアの倫理、臨床死生学

b 研究課題

1) ケアの倫理における「共感」と「認識上の責任」についての哲学的分析とその臨床的展開

ケアの倫理における中心概念である「共感」に関して、その身体的・情動的側面を踏まえつつも、(これまで見落とされがちであった) その認知的・知性的側面を主題的に分析する。そのことを通して「共感」とそれに伴う「認識上の責任」を、臨床の場に即した複雑さと深みを備えたものとして理論化する。

ケアの倫理によれば、従来の功利主義的な生命倫理は、患者 (患者家族) の置かれている具体的な状況に関する「認識上の責任」(責任をもって認識すること) を果たしていない点で不十分だとされる。このような具体的な状況の認知において、共感が重要な働きをすることは疑いえない。しかし他方、共感には認知的なバイアスが働くことが指摘されている。そこで、共感 (共苦) の危うさや困難さを踏まえつつ、医療従事者—患者 (患者家族) 関係における望ましい共感のあり方と、それに伴う認識上の責任を明らかにする。

2) 関係的な自律論の構築とその臨床的展開

ケアの倫理の立場から関係的な自律論を構築すると同時にその臨床的応用を試みる。生命倫理における個人主義的な自律論は、個人の独立性と他者からの不干渉を基調とする自己決定を核としてきた。それに対してケアの倫理は、人間の相互依存性と傷つきやすさに着目する。そして一定の依存関係や社会的環境の中で育まれるものとして自律を捉える。しかしながら、依存性と自律性は緊張関係にもあるため、個人主義的な自律論はなお根強い。そこで、自律性と依存性の諸相および自律性と依存性の結びつきについて徹底的に検討することを通して、関係的自律論をより十全なものにする。そのうえで、医療従事者・患者・患者家族、それを取り巻く社会的/文化的環境という要素を考慮しつつ、関係的な自律の概念を、臨床における共同的意思決定プロセスに適うものへと鍛え上げたい。

c 概要と自己評価

(1) ケアの倫理の研究——ケアの倫理の認識論的展開

「ケアの倫理」の一つの主要な特徴は、(知覚を含む広義での)「認識」というものを、他のアプローチよりいっそう重視する点にある。そこでは、他者への「倫理」的な応答は、その他者に関する具体的な「認識」と分かち難く結びついている。すなわち、その相手が実際どういった状況に置かれ、また当の状況において、どのような

複雑な思いや切実なニーズを抱えているのか等に関する、繊細で文脈化された認識が伴っていなければ、適切な倫理的応答は為されない。

こういったケアの倫理に内在する「認識論的傾向」を踏まえるならば、ケアの倫理をさらに充実したものへと発展させることができるかどうかは、ケアの倫理が胚胎する認識論を、どれほど豊かなものにできるかに、部分的に依存することになる。そこで今年度の研究では、(1) ケアの倫理に見られる認識的な次元の重視という点をギリガン、ノディングズ、キテイにおいて確認し、(2) そのうえで認識活動において核となる「聞く」という営みと、それに伴う共感的な受容性の働きについて、批判的に考察した。

(2) 行為論の研究——関係的な自律論の研究

1990年代から2000年代にかけて英語圏で新たに登場してきたフェミニストによる「関係的な自律論」(relational autonomy)に関して、その代表的な論者の議論を概観し、その重大な意義を明らかにした。

関係的な自律論は、人間の相互依存性と傷つきやすさに着目し、一定の依存関係や社会的環境の中で育まれるものとして自律を捉える。むろん関係性といっても、自律を可能にする関係性のみならず、自律を妨げる関係性——虐待的關係・従属的關係——もあるがゆえに、関係的な自律論を採用する論者は、あらゆる関係性が自律の実現に貢献するという楽観主義を支持しているわけではない。むしろ、関係性が、自律の成立を深刻な仕方で妨げたり、損なったりするからこそ、どのような関係性が自律にとって重要なのかを批判的に考察するのである。

とりわけ今年度の研究では、このような特徴をもつ関係的自律論が、従来の個人主義的な自律論よりも、抑圧的な人間関係やその背後にある抑圧的な社会的環境を批判的に捉えることができる点で優れているということを示した。簡単に説明すると以下のようなになる。関係的自律論も従来の自律論も、「私はいかに生きるべきか」という実存的関心を中心に据えている点では共通している。しかしながら、「自律の中心要件を、本人が納得できる自己決定」と考える従来の自律論と異なり、関係的自律論は、「自律的な人格であるためには、不当な社会規範について批判的な問題意識をもっていなければならない」と主張する。すなわち、抑圧的な社会規範(家父長制、性差別等)に抵抗するような批判的なスタンスをもっていなければならない。なぜなら、そのような社会的な抑圧こそが、女性や社会的に不利な立場にある人が、その人らしい生き方をするのを妨げている当のものだからである。このように自律が、本人が納得できる自己決定以上のもの、すなわち、不当な社会規範に対する批判的スタンスを伴うものとして捉えられることで、自律の理念は社会正義により適い、自己志向性のみならず他者志向性も併せもつようになる、という点を明らかにした。

d 主要業績 (2017年4月～2018年3月)

(1) 論文

「脆弱性・依存性・応答性をはらむ行為者性概念へ——現代行為論からケアの倫理へ」、『文化交流研究』(東京大学文学部次世代人文学開発センター研究紀要) 第31号、11-26頁、2018.3

(2) 学会講演・研究会発表等

「臨床における共感——その複雑さと困難さ」第2回ケアの哲学学会大会、教育講演、東京(白百合女子大学)、2017.9.16(指名あり)

「ケアの倫理に内在する「認識論」の展開に向けて」第77回日本倫理学会大会主題別討議「ケアの倫理——その変遷と展開」、弘前(弘前大学)、2017.10.7(指名あり)

”Relational Approaches to Autonomy” 2017年度第3回行為論研究会、東京(東京大学) 2017.1.27

”Empathy as a Diachronic Process” 瀬戸内哲学研究会ワークショップ「共感と道徳」、広島(広島工業大学)、2018.2.25(招待あり)

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

非常勤講師 三重県立看護大学「キャリアデザインⅡ」(2017年6～7月)

「臨床における共感——その複雑さと困難さ」第5回北陸地区臨床倫理事例研究会・平成28年度石川県高度専門医療人材養成事業、第6回北陸地区臨床倫理事例研究会・石川県高度専門医療人材養成事業主催、金沢(金沢大学附属病院CPDセンター)、2017.9.11

「臨床倫理エッセンシャルズ 入門編」「事例検討 上級編 ステップ3とワーク」第6回愛媛地区臨床倫理事例研究会、東温(愛媛大学医学部付属病院)、2017.10.14

「臨床倫理エッセンシャルズ 入門編」第2回関西臨床倫理セミナー、大阪(大阪市立総合医療センターさくらホール)、2017.12.3

「「わかりあえなさ」も大切にする共感：臨床ケアの一要素」第68回日本救急医学会関東地方会学術集会ランチ
ンセミナー5、東京（東京大学）、2018.1.27

「臨床倫理エッセンシャルズ 入門編」第3回臨床倫理セミナーin ちくご、ちくごかんわ研究会主催・久留米大学病
院緩和ケアチーム・久留米ネットワークの会共催、久留米（久留米大学病院会議室）、2018.3.11

(2) 学会

哲学会（2003年4月～現在）

上智大学哲学会（2003年4月～現在）、同委員および編集委員（2010年4月～2013年3月）

日本倫理学会（2005年8月～現在）

日本科学哲学会（2006年12月～現在）

日本哲学会（2006年12月～現在）

第25回日本生命倫理学会大会実行委員（2013年5月～12月）

ケアの哲学学会（2016年9月～現在）

日本医学哲学倫理学会（2017年8月）